

歌人 小島ゆかり・俵万智の作品の特色を明らかにする — 歌風の変遷と言葉の持つイメージ —

矢澤 愛実

短歌とは、日本に古くから伝わる伝統のある文学である。日々の生活を歌に詠み込んでいく歌人にとって、自身の人生の経験は短歌の創作、表現に大きく関わらるだろう。ならば、心に大きく影響を与える出来事を経験したとき、それはどのような形で作品に表れるのだろうか。今回、社会的に大きな出来事であった“東日本大震災”の経験と、一人の女性としての人生の転機である“出産”の経験に焦点を当て、小島ゆかり、俵万智のふたりの女流歌人の作品の特色を明らかにすることを目的として調査を行った。現代歌人であるため、学術論文としての先行研究はほとんどない。しかし、あえて現代の歌人を対象にする理由としては、インタビューすることが可能だからである。本研究のために作成した震災詠のデータベースが、震災資料として短歌のアーカイブになること、日本の伝統文化である短歌を分析することで文学のさらなる進展に繋げ、今後の短歌研究の役に立てることを目指している。

研究方法は、歌集の収集・分析、文献調査、インタビュー調査の3つとした。震災詠を(1)震災語が含まれている短歌の数、(2)感情を表す言葉が含まれている短歌の数、(3)地名・季節・自然を表す語が含まれる数、(4)オノマトペ・リフレイン・倒置が含まれる数、(5)比喩の数・対象の観点から分析を進めた結果、俵の震災詠には、震災語が少なく、前向きに乗り越えようとする意志を感じられる短歌が多かった。この背景としては、俵が震災後、石垣島に移住し、詠まれる対象が震災から新しい生活にシフトしたことが挙げられる。対して、小島ゆかりの震災詠には、震災語や動植物を表す語が多く含まれており、「命」を見つめ、対象に感情移入して詠まれているものが多かった。つづいて、子どもを詠んだ歌を(1)感情を表す語が含まれている短歌の数、(2)会話のような表現が含まれている短歌の数、(3)オノマトペが含まれている短歌の数、(4)比喩の数・対象、(5)人称代名詞とその他の呼称の観点から分析を進めた結果、子どもを持つ前と後では、両者ともに、ポジティブな意味合いを持つ感情語が多くなり、子どもに語り掛けるような会話表現や、オノマトペの出現率も多くなるということが分かった。また、比喩表現で子どもを食べ物に例えて詠まれている短歌も多くみられ、このことから子どもを愛おしい存在として捉えていることがわかった。俵は、自由な時間のあまりない子育て中でも、「子どもの表情を捉えたりするには短歌は都合が良い」と述べている。また、インタビュー調査にて小島は、「子どもができることで、自分に見える世界が広がり、それが創作にも影響を与える」と述べていた。以上のことから、出産後、子どもを通して日常を見ることで、作品の表現にも変化があることが分かった。

今回、調査を進めるにあたって、含まれる語や技法の観点から調査を行ったが、さらに詳しく分析を行うためには、字余りや動詞・名詞の数などにも着目する必要がある。今後、他の災害や、自身が子として親を詠んだ短歌についても調査していきたい。

(指導教員 綿抜豊昭)